U.D.C. 669.35-147

銅合金溶湯とシェルモールドとの鋳型反応について

Mold Reaction between Shell Mold and Molten Copper Alloys

汇. 夫* 高 刺 橋 清 Mitsuo Takahashi Seifu Esashi

梗

概

銅合金を反射炉 (スクレナー炉) で溶解し、シェルモールドによって水圧部品を鋳造した場合、従来の砂型 鋳造の場合に見られぬ水圧不良が発生した。筆者らはこの原因を究明するため、銅合金溶湯とシェルモールド 間の鋳型反応について検討した結果、シェルモールドとの反応を少なくするためには、溶湯中の酸化物および 硫化物を極力少なくすること,このための溶解方法としては弱酸化性ふん囲気で溶解し完全脱酸することが適 切であることを確かめた。

1. 緒 言

銅合金(材質: BC-6)の井戸ポンプ部品をシェルモールド鋳造に より量産化するにあたり,従来の砂型鋳造に見られぬ高率の水圧不 良が発生した。筆者らはこの原因を究明するため、まず反射炉(ス クレナー炉)における銅合金溶解法の検討を行ない、反射炉におい ては、炉内ふん囲気の溶湯特性に及ぼす影響がきわめて大きいこと と同時に、同一溶湯でもシェルモールドと砂型では、明らかに異な

第1表 各溶解条件の炉内ふん囲気

炉内ふん囲気		燃 焼	条件	ガ	和动业官学			
		風 圧 (in/H ₂ O)	重油供給	CO	CO ₂	O ₂	一迥粉空风伞	
酸	化	性	15	多	$0 \sim 2.8$	7.8~10.2	$5.4 \sim 7.5$	1.5
弱	酸化	性	13	中	$2.4 \sim 4.5$	$5.3 \sim 9.6$	2.3~6.2	1.3
還	元	性	10	少	7.6~11.4	5.3~ 7.0	$1.3 \sim 2.0$	1.0

った現象を呈することを確認した。

したがってこれは、シェルモールドより発生する特有のガスと溶 湯との鋳型反応であると想定し、この鋳型反応を極力少なくするた めの溶解条件の探究を行なった。

本稿はこの間における, 主として銅合金溶湯とシェルモールドと の鋳型反応について考察したものである。

2. 予備実験

まず溶解条件,および鋳型の影響を検討するために純銅を採り, 反射炉における炉内ふん囲気を第1表のように変化させて溶解した ものを、50 \$\u03c6 \u222550 h の砂型およびシェルモールドに鋳造した。

この場合の溶湯中に残留する〔O〕,〔S〕を分析した結果を第2表 に, また酸化溶解で P-Cu 0.5% 添加処理した溶湯の試験片の顕微 鏡組織を第1図に示した。

さらに上記同様の方法で、銅合金 (BC 6) の機械的性質に及ぼす 影響を調べ,この結果を第2図に示した。

これらの結果を要約すれば,

(1) 反射炉の炉内ふん囲気を酸化性とした場合, 銅合金の溶湯 中には 0.1~0.4% [O] が含有し、また還元溶解した場合には 0.04 ~0.07% [S] が含有する。

(2) 同一溶湯において、シェルモールド鋳造の場合は、砂型鋳 造よりピンホールの発生しやすいことが明らかである。

(3) 機械的性質は、シェルモールド鋳物においても、酸化溶解 を行なって十分に脱酸処理をしたものが最も良い結果を示した。

3. 溶湯の冶金学的考察

銅合金鋳物の溶解およびシェルモールドへの注湯時に伴うと考え

第2表 溶銅中の〔O〕,〔S〕分析結果

10 ⁻¹ (171)	唐 14-	4.0	W1 H5	The	(0)	%	(S)	%
俗胜	余叶	īΑ	村 林	41	砂型	シェル型	砂型	シェル型
		溶		落	0.3	0.3	0.004	0.005
酸化	溶解	脱	酸	前	0.2	0.2	0.004	0.002
0.5%	P-Cu	脱	酸直	後	0.2	0.2	0.004	0.002
		出	湯	時	0.1	0.1	0.004	0.001
		溶		落	0.45	0.45	0.002	0.004
酸化	溶解	脱	酸	前	0.45	0.5	0.002	0.001
1.0%	P-Cu	脱	酸直	後	0.4	0.4	0.001	0.001
		出	湯	時	0.4	0.4	0.001	0.002
		溶		落	0.35	0.35	0.003	0.002
酸化	溶解	脱	酸	前	0.35	0.36	0.003	0.002
1.5%	P-Cu	脱	酸直	後	0.03	0.03	0.002	0.003
		出	湯	時	0.035	0.035	0.003	0.003
		溶		落	0.05	0.05	0.042	0.048
還元	溶解	脱	酸	前	0.045	0.045	0.060	0.061
0.5%	P-Cu	脱	酸直	後	0.04	0.04	0.072	0.070
		出	湯	時	0.04	0.04	0.070	0.072
		溶		落	0.05	0.05	0.046	0.040
還元	溶解	脱	酸	前	0.055	0.055	0.059	0.053
1.0%	P-Cu	脱	酸直	後	0.04	0.025	0.055	0.043
		出	湯	時	0.03	0.02	0.050	0.054



られる化学反応を考察するにあたり、これらの標準生成自由エネル ギーを第3表に示す(1)(2)(3)。 反射炉における炉内ふん囲気は,送風量と重油供給量の多少によ って変化し、この場合は前述第2表の結果から明らかなように、 [O][S] が溶解条件によって大きく変化する。したがって銅合金鋳 物の溶湯に及ぼすO, Sの挙動について考察すると、たとえば第3 * 日立製作所多賀工場

材質	CuC,	酸化落	解,	脱酸処	理後	(0.5%	p-Cu	(添加)
左:	ジェル	-型				右	: 砂	型
第1図	顕	徴	鏡	組	織	倍率	$\times 100$	電解研摩

銅合金溶湯とシェルモールドとの鋳型反応について



839

表により,

 $4Cu+O_2 \rightarrow 2Cu_2O, \qquad \Delta F_T^0 < 0 \dots (1)$ $4Cu+S_2 \rightarrow 2Cu_2S, \qquad \Delta F_T^0 < 0 \dots (2)$ となり、純銅鋳物の溶湯中には、Cu, Cu₂O, Cu₂S が存在すること が明らかである。 また重油の燃焼によって生ずる SO₂ ガスは、

 $6 \operatorname{Cu}^{(l)} + \operatorname{SO}_{2}^{(g)} \to 2 \operatorname{Cu}_{2} \operatorname{O}^{(l)} + \operatorname{Cu}_{2} \operatorname{S}^{(l)} \qquad \varDelta F_{T}^{0} > 0$(3)

となり,溶融状態において逆反応を起こし, Cu₂O と Cu₂S が反応して SO₂ ガスを発生するため,溶湯と反応するとは考えられない。

ここで溶湯中の〔O〕と〔S〕の関係を調べると、(3)式は質量作用の法則により、

 $[Cu_2S][Cu_2O]^2 = K_g$ あるいは $[S][O]^2 = K_g'$ と置ける。今液相と気相間の分配平衡を知るには,

 $(a) 2Cu_2S=4Cu+S_2$

 $P_{S_2} = K_{\mathbf{S}} [Cu_2 S]^2 \dots (4)$

または,

$$P_{S_2} = K'_S [S]^2$$
(4)

- $(b) 2Cu_2O = 4Cu + O_2$
 - $P_{O_2} = K_O[Cu_2O]^2$ (5)
 - $P_{O_2} = K'_O[O]^2$ (5)'

これらの恒数Kを知ることである。気相内においては,

の関係があるゆえ,

14	C 3 1 2 112 3 1 C114 3	21,300 1 20.011	(200) -2,000
15	$2 H_2^{(g)} + S_2^{(g)} \rightarrow 2 H_2 S^{(g)}$	-41,700+22.70T	
16	$\begin{array}{c} 3 \operatorname{Cu}_{2} O^{(l)} + \operatorname{CH}_{4}^{(g)} \rightarrow \\ & 6 \operatorname{Cu}^{(l)} + 2 \operatorname{H}_{2} O^{(g)} + \operatorname{CO}^{(g)} \\ 3 \operatorname{Cu}_{2} O^{(s)} + \operatorname{CH}_{4}^{(g)} \rightarrow \\ & 6 \operatorname{Cu}^{(l)} + 2 \operatorname{H}_{2} O^{(g)} + \operatorname{CO}^{(g)} \end{array}$	-26,250-52.24 <i>T</i> 14,070-78.98 <i>T</i>	$1,236 \sim 2,000$ $1,083 \sim 1,236$
17	$Cu_{2}O^{(l)} + CO^{(g)} \rightarrow 2 Cu^{(l)} + CO_{2}^{(g)}$ $Cu_{2}O^{(s)} + CO^{(g)} \rightarrow 2 Cu^{(l)} + CO_{2}^{(g)}$	$\begin{vmatrix} -33,930+ \ 9.43T \\ -20,490+ \ 0.51T \end{vmatrix}$	1,236~2,000 1,086~1,236
18	$2 \operatorname{Cu}_{2} S^{(s)} + \operatorname{CH}_{4}^{(g)} \rightarrow 4 \operatorname{Cu}^{(l)} + 2 \operatorname{H}_{2} S^{(g)} + C^{(G)}$ $2 \operatorname{Cu}_{2} S^{(l)} + \operatorname{CH}_{4}^{(g)} \rightarrow 4 \operatorname{Cu}^{(l)} + 2 \operatorname{H}_{2} S^{(g)} + C^{(G)}$	40,910-16.83 <i>T</i> 29,910- 8.98 <i>T</i>	$1,086 \sim 1,127$ $1,127 \sim 2,000$
19	$Cu_{2}S^{(g)} + H_{2}^{(g)} \rightarrow 2Cu^{(l)} + H_{2}S^{(g)}$ $Cu_{2}S^{(l)} + H_{2}^{(g)} \rightarrow 2Cu^{(l)} + H_{2}S^{(g)}$	9,475+4.89T 3.975+9.31T	1,080~1,127 1,127~2,000
20	$Cu_{2}S^{(s)}+2CO^{(g)} \rightarrow 2Cu^{(l)}+SO_{2}^{(g)}+2C^{(G)}$ $Cu_{2}S^{(l)}+2CO^{(g)} \rightarrow 2Cu^{(l)}+SO_{2}^{(g)}+2C^{(G)}$	-2,800+52.69T -8,300+57.11T	1,080~1,127 1,127~2,000
21	$Zn^{(l)} \rightarrow Zn^{(g)}$	28,000-25.80T	420~ 910
22	$2 \operatorname{Zn}^{(s)} + \operatorname{O}_{2}^{(g)} \rightarrow 2 \operatorname{ZnO}^{(s)}$ $2 \operatorname{Zn}^{(l)} + \operatorname{O}_{2}^{(g)} \rightarrow 2 \operatorname{ZnO}^{(l)}$ $2 \operatorname{Zn}^{(g)} + \operatorname{O}^{2(g)} \rightarrow 2 \operatorname{ZnO}^{(g)}$	-165,000+44.00T -175,000+58.50T -195,500+75.50T	\sim 420 420 \sim 920 920 \sim 1,300
23	$2 \operatorname{Zn}^{(g)} + \operatorname{S}_{2}^{(g)} \rightarrow 2 \operatorname{ZnS}^{(s)}$ $2 \operatorname{Zn}^{(l)} + \operatorname{S}_{2}^{(g)} \rightarrow 2 \operatorname{ZnS}^{(l)}$ $2 \operatorname{Zn}^{(g)} + \operatorname{S}_{2}^{(g)} \rightarrow 2 \operatorname{ZnS}^{(g)}$	-119,800+43.10T -188,500 +101.00T	~ 910 910~1,300
24	$Sn+O_2 \rightarrow SnO_2$	-135,800+42.40T	
25	$Sn+S(Rh) \rightarrow SnS$	恒温, 恒圧反応熱 4H ₁₈ =-22,700 ±1,000	18°C,1 atm
26	$Pb+O_2 \rightarrow PbO_2$	$\Delta H_{18} = -63,700 \pm 130$	18°C,1 atm
27	$\begin{array}{l} \operatorname{Pb}^{(s)} + S^{(g)} \to \operatorname{Pb}S^{(s)} \\ \operatorname{Pb}^{(l)} + S^{(g)} \to \operatorname{Pb}S^{(l)} \end{array}$	$\begin{vmatrix} -72,000+33,6 & T \\ -75,500+40.0 & T \end{vmatrix}$	\sim 320 320 \sim 1,100
28	$2/5 P_2 + O_2 \rightarrow 2/5 P_2O_5$	-150,500+50.7 T	

 $P_{S_2} = 1.17 \times 10^{-6}$

 $P_{O_2} = 2.6 \times 10^{-5}$

が得られる。また Cu-Cu₂S 系状態図において銅側飽和融液と、これに対して平衡する硫化物とは、同一の硫黄蒸気圧を有すると考え

$$K_{g}' = \frac{P_{SO_{2}}}{K_{A} \cdot K_{S}'^{1/2} \cdot K_{O}'} \dots (7)'$$
に代入して K_{g}, K_{g}' がわかる。
ここで分解圧 $P_{S_{2}}, P_{O_{2}}$ は(1), (2)式の ΔF を用いて,
 $\log P = -\frac{\Delta F}{R \cdot T}$ (R=4.57)

(7)' る。酸素も同様に Cu-Cu₂O 系状態図を基とすれば、1,100°C におけ る飽和融液は、Cu₂S=8%([S]=1.6%)、Cu₂O=4.8%([O]=5.3%) となる。これらを用いて恒数 K_s、K_o を計算すると、 $K_{s}=1.83 \times 10^{-8}$ $K'_{S}=4.57 \times 10^{-7}$ $K_{o}=1.12 \times 10^{-6}$ $K'_{O}=1.40 \times 10^{-4}$ となる。また(6)式における ΔF_{T}^{0} は、 $\Delta F_{T}^{0}=-86,525+17.25 T$







第5図 発生ガス捕集装置

 $\Delta F = -RT \log K_{\rm A}$

より 1,100℃ において, K_A=2.64×10⁹ を得る。

これらの値を(7), (7)'式に代入してみると, 発生する SO2 ガ ス分圧が1気圧のとき,

 $K_g = 2.51$ $K_g' = 0.00634$

となる。

同様にして、1気圧のもとではつぎのようになる。

1,200℃ では,

 $K_{g}'=0.0186$

1,400℃ では,

第7図 N₂による分析結果

ガスの分圧を 0.2 気圧として計算すれば,

 $K_{g}'=0.00127$

を得る。

これらの関係を第3図の曲線で示した。実際に前述の実験により 得た第2表の分析値を,この図に示すと,良くこれらの理論値と一 致することが明らかである。

4. シェルモールド発生ガス分析

シェルモールドに溶融金属を鋳込んだ場合、鋳型の結合剤である フェノールレジンが急速に加熱されて熱分解を起こす。この発生ガ スの組成について、小林氏らは鋼を用いて測定した値を報告されて いるが(4),日立製作所多賀工場のシェルモールドについて銅合金を 鋳込んだ場合にいかなる結果を生ずるかを知るため、次のようなガ ス分析を行なった。 すなわち,材料には自家製レジン・コーテッドサンド(3.5%レン ジ配合)を使用し、ガス発生装置として第4図に示した容器を使用 した。

 $K_{g}' = 0.0726$

これによって溶湯中における硫黄含量の平方根と,酸素含量の積 がこれらの値を超過すれば、SO2 ガスをつくって放出されることに なる。SO21気圧と考えたのは、気ほうをつくって溶湯から脱出す るために必要なのであるが、しかし溶湯の層がはなはだ薄いか、あ るいはかくはん作用が十分な場合には、もっと低くてよいわけで、普 通は0.2~1気圧の中間と考えられている⁽¹⁾。いま 1,100℃ にて SO₂



第8図 鋳込後の時間と発生ガス組成分の関係

この容器の内面に,金型(材質:BC 6)温度 230 \mathbb{C} ・セッティン グタイム 15 秒・キュアタイム 60 秒・炉内温度 350 \mathbb{C} の条件で,ジ ェル厚を約7 mm にコーテッドサンドを焼成した。焼成した容器 は,第5 図に示す捕集装置にセットし,ガラス製捕集ビン(30 cc)中 を 2 mmHg まで減圧したところで発生容器の下部から 30~40 mm 高さまで溶湯中(BC 6)に急速に浸漬し,直後より所定時間に従っ てコックを開き発生ガスを各捕集ビン中に常圧になるまで採取し た。

ガス分析は、ガスクロマトグラフィー(日立, KGL-2形)によっ て行なった。最初O₂, N₂, CH₄, CO を分析するためにキャリヤガス $2 \operatorname{Cu}_2 S + \operatorname{CH}_4 \longrightarrow 4 \operatorname{Cu}_2 S + \operatorname{H}_2 S + C$ $\operatorname{Cu}_2 S + \operatorname{H}_2 \longrightarrow 2 \operatorname{Cu}_2 H_2 S$

 $Cu_2S + 2CO \longrightarrow 2Cu + SO_2 + 2C$

これらの標準生成自由エネルギーは、1,000~1,400℃で、すべて $\Delta F_T^0 > 0$ であるゆえ、上式の反応はすべて逆反応をすることがわか る。したがって溶湯中の Cu_2S とシェルモールドの発生ガスとの反 応はないと考えてよい。

5.2 Cu2Oと発生ガスの反応

第1表により溶湯の凝固点付近の標準生成自由エネルギーを計算 すると、第4表のとおりである。

-						
	反	応	$\varDelta F^{0}_{1273}$	ΔF^{0}_{1373}	ΔF^{0}_{1473}	
	$3 \operatorname{Cu}_2\operatorname{O} + \operatorname{CH}_4 \rightarrow 6 \operatorname{C}$	$Cu+2H_2O+CO$	-86,400	-94,400	-103,200	
	$Cu_2O + H_2 \rightarrow 2Cu +$	H2O	-20,900	-21,500	- 22,400	
	$Cu_2O + CO \rightarrow 2Cu +$	-CO2	-19,800	-19,700	- 20,000	

第4表 標準生成自由エネルギー (cal/g·mol)

これらはすべて $\varDelta F_T^0 < 0$ であり,特に CH_4 による反応は,温度 が高いほど進行しやすいことを示している。たとえば 1,000℃ にお いて

$3 \operatorname{Cu}_2 O + \operatorname{CH}_4 \longrightarrow 6 \operatorname{Cu} + 2 \operatorname{H}_2 O + \operatorname{CO}$

なる反応によって発生するガス(H₂O, CO)が1気圧になれば,鋳物 に気孔ができる原因と考えられる。この発生するガスが1気圧にな

として He を使用し,次にキャリヤガスを N₂に変えて H₂の分析を 行なった。結果はグラフに現われたピークの位置によって定性分析 をし,ピークの高さを測定し,検量線を利用して各組成の分圧を求 め,これによって各成分の混合割合(%)を求めた。分析結果の一部 を**第6,7** 図に示す。

各成分の鋳込み後の経過時間に対する影響を第8図に示す。すな わち、5秒後には $N_2 \ge O_2$ のみで空気のみが存在することを示して いる。その後 N_2 , O_2 は急激に減少し、特に N_2 の減少量と発生ガス とは反比例的関係にあり、 N_2 の減少量から発生ガス量の傾向を知る ことができると思われる。7秒以後からは H_2 , CO, CH₄ が増加し、 これから発生ガスは、 H_2 , CO, CH₄ と考えられる。

発生ガスの組成としては、 H_2 が大部分で、つぎに CO、 CH₄の順 である。CH₄が割合に少ないが、これは

$$CH_4 + \frac{1}{2}O_2 \longrightarrow CO + 2H_2$$

なる反応が起こることを考えれば、当然シェルモールドを急速に加熱した場合には CH₄ が多く、徐熱の場合には H₂ が多くなるものであろう⁽⁴⁾。

5. 溶湯とシェルモールドの反応

このような発生ガス (H₂, CO, CH₄) は, 第1表に示したように, 銅合金と非常に反応しやすく, 溶湯が鋳型内において凝固する間 に,これらのガスと反応することは明らかである。たとえば筆者ら の行なった鋳型内の凝固時間の測定結果では, 拡張力試験片鋳型 (シェルモールド, JIS. 4号) 内において, 肉厚 20 ¢ の平行部分の 冷却速度は BC-6 溶湯を, 1,120℃ で鋳込んだ場合, 鋳込み後約7 秒で凝固点に達し,約15秒後に凝固終了点に達することが明らか となっている。 ここでは, 溶湯中に存在する酸化物 (Cu₂O) や硫化物 (Cu₂S) およ びこれらが凝固中に反応して生ずる SO₂ と, シェルモールドの発生 ガス (H₂, CO, CH₄) との間の反応について二, 三の考察を行なっ た。 るためには、CH₄の分圧は次の計算によってほぼ知ることができる。

$$\begin{aligned} \Delta F_{1273}^{0} &= -86,400 \quad (\text{cal/g} \cdot \text{mol}) \\ K &= \frac{P_{\text{H}_2\text{O}}^2 \cdot P_{\text{CO}}}{P_{\text{CH}_4}} \\ \log K &= -\frac{\Delta F}{R \cdot T} \end{aligned}$$
の関係から、 $P_{\text{H}_2\text{O}}^2 \cdot P_{\text{CO}} = 1 \succeq \exists i \neq j \notin \vec{x}, \\ P_{\text{CH}_4} &= \frac{1}{K} \\ &= 1.41 \times 10^{-15} \quad (\text{atm}) \end{aligned}$

となる。実際に発生するガスが1気圧の場合は P_{H_2O} ・ $P_{CO} < 1$ であるゆえ、 1.41×10^{-15} atm 以下の CH₄ が溶湯中に存在することによって気孔を生ずる原因になるものと考えられる。

5.3 SO2と発生ガスの反応

反応しないことも明らかである。

 $2 \operatorname{Cu}_2 O^{(l)} + \operatorname{Cu}_2 S^{(l)} \longrightarrow 6 \operatorname{Cu}^{(l)} + \operatorname{SO}_2^{(g)}$

上式の反応は、溶湯が凝固中に進行しSO₂^(g)の分圧が上昇し、1 気圧以上となって気孔を発生しようとする。さらにこの分圧が1気 圧以下の状態でも鋳型の発生ガスと反応すれば、その生成気体の圧 力が1気圧以上に達することがあり、したがって気孔を生ずること も考えられる。すなわちシェルモールドの発生ガスとの反応式とし ては、1,00℃において、

	$2 \operatorname{SO}_2 + \operatorname{CH}_4 \longrightarrow 2 \operatorname{H}_2 \operatorname{O} + \operatorname{CO}_2 + \operatorname{S}_2$	$\varDelta F_1 \!=\! -69,000$
	$2 \operatorname{SO}_2 + 4 \operatorname{H}_2 \longrightarrow 4 \operatorname{H}_2 \operatorname{O} + \operatorname{S}_2$	$\varDelta F_2 = -38,750$
	$2 \operatorname{SO}_2 + 2 \operatorname{CO} \longrightarrow \operatorname{CO}_2 + 2 \operatorname{O}^2 + \mathrm{S} + \mathrm{C}$	$\varDelta F_3 > 0$
であり,	CH ₄ の反応が著しいことがわかる。たた	EL CO は SO2 とは

5.1 Cu₂Sと発生ガスの反応 反応式

立 評

第45卷第5号

K=1.76×10¹⁶ (atm) となる。ここで

$$K = \frac{P_{\rm H_{2}O}^{6} \cdot P_{\rm S_{2}}^{2} \cdot P_{\rm CO_{2}}}{P_{\rm SO_{2}}^{4} \cdot P_{\rm CH_{4}} \cdot P_{\rm H_{2}}^{4}}$$

なる関係において, 溶湯中の SO_2 の分圧は前述のとおり, 1,100 においては, 0.00634 であり, またシェルモールドの発生ガスがすべ て溶湯と反応したと仮定し, その分圧をそれぞれ $P_{CH_4}=0.3$, $P_{H_2}=0.3$ であったとすれば, これらの値を上式に代入して,

 $P_{H_2O}^6 \cdot P_{S_2}^2 \cdot P_{CO_2} = = 7.26 \times 10^4$ (atm) となる。したがって反応によって発生するガスは、すべて1気圧以 上の分圧をもつことになる。

また逆に,等圧の P_{CH_4} , P_{H_2} が上式によって反応を起こし P_{H_2O} , P_{S_2} , P_{CO_2} をそれぞれ1気圧ずつ発生したと仮定してみれば,

$$P_{\rm CH_4} \cdot P_{\rm H_2}^4 = \frac{P_{\rm H_2O}^6 \cdot P_{\rm S_2}^2 \cdot P_{\rm CO_2}}{K \cdot P_{\rm SO_2}^4}$$
$$P_{\rm CH_4} \cdot P_{\rm H_2}^4 = \boldsymbol{P}_{\rm A}^5$$

なる関係より,

 $P_{\rm A} = 3.20 \times 10^{-2}$ (atm)

を得る。すなわち 1,100℃ において, 溶湯中に CH₄, H₂が, それぞ れ約 0.03 気圧以上あれば, 0.00634 気圧の SO₂ と反応して, 発生す と、第5表のとおりである。

論

第5表化合物の安定度

安 定 度 順 位 (大なるものより)	酸化物	硫化物
1	ZnO	ZnS
2	SnO ₂	Cu ₂ S
3	PbO	PbS
4	Cu ₂ O	
5	CuO	

ここで ZnO および ZnS はほとんど沸騰してしまうため, 溶湯中 に存在するこれらの化合物(気体)は, ごく少量であろう。これら の化合物はすべて前述の反応と同様に, 溶湯中において, また鋳型 と反応を起こすことが考えられるのである。

6. 結 言

以上の考察を要約すれば、次のとおりである。

(1) シェルモールドの発生ガスは, 鋳込み後約6秒で, H₂, CH₄, CO を発生する。

(2) シェルモールドの発生ガスは,溶湯中の硫化物とは反応しないが,酸化物とは非常に反応しやすく,気孔をつくる原因となる。また溶湯中の硫化物と酸化物が,凝固中に反応して発生する1気圧以下のSO₂とも,シェルモールドの発生ガスは反応しやすく,鋳物に気孔をつくる原因になる。

るガス (H₂O, S₂, CO₂)の分圧はそれぞれ1気圧以上となることになる。

このように,この反応を起こすことによって発生するガス圧は, 著しく大きいことが明らかである。

5.4 溶湯中の酸化物および硫化物について

銅合金の溶湯中には, Zn, Sn, Pb があり, これらは大部分 Cu と 固溶体をつくるものであるが, しかし一部はこれらの酸化物または 硫化物として存在することも考えられる。第3表を用いて, 1,000℃ における酸化物および硫化物を安定度の大なるものから順に示す (3) シェルモールドに注湯する溶湯としては,溶湯中の酸化物および硫化物をできるかぎり少なくすることが最も重要である。

参考文献

- (1) 小川: 非鉄製練の基礎, 121 (昭27, 産業図書)
- (2) 沢村: 理論鉄治金学, 89 (昭30, 丸善)
- (3) R. W. Ruddle: The Physical Chemistry of Copper Smelting, 151 (1952)
- (4) 小林: S 32 年度 JSMA 研究報告, 24 (昭 33, 日本シェル モールド協会)



----- 86 -----

カンチレバーが両側にあるアンローダでは、マントロリがたとえ ば左側から右側のカンチレバーに移動する場合は、後退しながら運 転室からグラブバケットを見ることになるので非能率的である。

この発明は前記の欠点を簡単に除いたものである。

駆動スプロケットホイルを回転してチェンを矢印方向に駆動すれ ば、トロリおよび運転室はともに右方へ移動する。そしてトロリは ストッパに当って停止される。止め棒を引っぱって止め穴から抜き 出せば運転室は旋回自由となる。さらに駆動スプロケットホイルを 回転すれば、トロリは停止したままでスプロケットホイルが回転さ れるので、運転室が旋回してその向きが変わる。向きの変ったとこ ろで止め棒を別の止め穴にはめこめば運転室はトロリに対して固定 される。 この発明によれば、簡単に運転室をマントロリのフレームに対し て移動および旋回させることにより、常にグラブバケットをマント ロリの前進方向に対して前方に位置させることができるので、作業 が便利になり能率が向上する。 (富 田)

